

3. 当院における日当直業務帯の輸血業務量推移

大橋 絢果、長谷川 浩子、山本 浩子、志水 基起、
伊藤 道博、井関 徹(千葉大学医学部附属病院 輸血部)、
澤部 祐司、野村 文夫(同 検査部)

【はじめに】当院では2001年より検査部、輸血部合同で輸血日当直業務を開始した。主な業務は、コンピュータグラフィックの採用により、カラム凝集法による血液型、不規則抗体検査、スライド法による入荷赤血球製剤のABO確認の検査業務と製剤入出庫管理である。今回我々は、2001年度から2009年度までの日当直業務帯における輸血業務量の推移について検討したので報告する。【対象】2001年度から2009年度の日当直業務帯での検査件数(血液型+不規則抗体検査)、血液製剤入出庫数の推移について比較検討した。【結果】検査件数は、2007年度より増加傾向を示し、2009年度では1006件と増加していた。製剤別の入出庫数では、RCC入庫数2001年度515袋から2005年度312袋に減少後、2009年度639袋へと増加、出庫数でも1824袋、1256袋、1915袋と増加傾向に転じており、2008年度と2009年度について比較すると平日で著明に増加していた。FFP出庫数では、2001年度2355袋から2009年度1414袋と減少していた。また2009年度における平均業務量を平日：休日と比較してみると検査(件/日)は1.5:5.2、入庫数(袋/日)ではRCC 1.2:2.9、FFP 0.2:0.6、PC 0.5:2.2、出庫数(袋/日)ではRCC 4.4:6.9、FFP 3.6:4.5、PC 0.5:2.2であった。【考察】検査件数増加は全自動輸血検査装置の導入、検体提出法の変更等も一因と考えられた。またRCC入出庫数増加については、一部診療科で手術件数の増加があり、それに伴い時間外への手術時間延長が増えたことも一因と考える。当院輸血日当直業務量は増加傾向を示しており、輸血部スタッフは、診療科とより密接に、連携し使用状況の把握、解析等を行い、適正な在庫量を確保することが、時間外業務担当者への我々の重要な支援のひとつと考える。(TEL:043-226-2479)

4. 輸血業務非専従技師からみた時間外輸血業務

長谷川 浩子、伊藤 道博、山本 浩子、大橋 絢果、
志水 基起、井関 徹(千葉大学医学部附属病院輸血部)、
澤部 祐司、野村 文夫(同検査部)

【はじめに】当院では2001年より検査部、輸血部合同で2名/日の日当直体制を開始し、うち1名が主に輸血業務を担当している。輸血検査はAuto-Vue(オリ社)を用いた血液型、不規則抗体検査、用手スライド法による入荷赤血球製剤のABO交叉試験を実施し、交差試験はほぼ100%、コンピュータグラフィックとしている。また検査依頼、製剤依頼共にオーダーリング化され、BTD-X2(オリ社)を用い管理を行っている。今回我々は、輸血非専従技師に時間外輸血業務に関するアンケート調査を実施し、その問題点を検討したので報告する。

【対象・方法】日当直担当者のうち輸血非専従技師27名を対象とし、時間外輸血業務に関する40項目についてアンケート調査を行った。

【結果】血液製剤入出庫および輸血検査機器の操作マニュアル等については、「現状特に問題ない」との回答が85%以上であり、概ね良好な回答であった。しかし「コンピュータグラフィック適応条件への理解度」は「曖昧」とする回答が44%。緊急O型赤血球製剤出庫に関しては「マニュアルが分かりにくい」との回答が30%、また「その実施に不安」とする回答は78%と高率であった。そして「時間外業務に関する定期トレーニング実施を希望」とした回答は93%となった。

【考察】時間外輸血業務の操作手技的な事項については理解度が深いと思われたが、反面、コンピュータグラフィックや緊急O型出庫といった血清学的検査を省略した製剤出庫への不安が強いことが判明した。また臨床側からの多様な問い合わせへの対応も問題点としてあげられた。我々は、臨床側からの問い合わせ内容を把握し、具体的な状況を想定した、定期トレーニングの実施を検討し、より安全な輸血業務の運用に反映していきたいと考える。(Tel:043-226-2479)